

第9章

木育運動推進のための資源の獲得と拡充

第1節 木育運動推進のための資源

運動を資源動員論から見ると、成功させるためにはいくつかの資源が必要となる。換言すれば、「不満はどんな社会にもあるが、利用可能な資源を獲得してはじめて社会運動が起きる」というのが資源動員論の中心的な主張とも言える〔帯谷 2003〕。この場合の資源とは、「運動組織にとって利用可能な一切の属性、環境、所有物」と定義することができる。具体的には、社会運動組織が活動するのに必要な「ヒト」「カネ」「ネットワーク」などであり、これらの資源を重視する。

帯谷は、J.Freeman (1979) による区分を参考に、金銭や場所などの「物的（有形）資源」とネットワークや専門家などの「人的（無形）資源」とに大別し、「森は海の恋人」運動の資源について表9.1のように整理している〔帯谷 2003〕。

表9.1の資源の種類を一般的な項目に直すと、物的資源として資金、活動場所、人的資源として活動する人、ネットワーク、専門家のノウハウに分類することができる。林野庁の木育は、理念も目標も明確と言えるが、実際にどのように進めるかについては不明確であった。林野庁の木育運動を資源動員論的に見ると、木育運動をすすめるようとする組織が活動するのに必要な「ヒト」「カネ」「モノ」「ネットワーク」などの資源が不十分であり、その資源の獲得・拡大方法については十分には示していない。これらの資源がどの

表 9.1 「森は海の恋人」運動の主な資源

	資源の種類	内 容
物的資源	①金銭	若干ある（シンポジウム開催などの運動費用）
	②場所	牡蠣処理作業場（事務所） ＝「合意形成の場」
人的資源	③商売上のネットワーク	部落内外の養殖業者 都内料理店・市場関係者 業界（水産），新聞の編集長
	④他地域（流域）との人脈	上流部：室根村農林課職員 中流部：「反対同盟」リーダー 下流部：市役所職員や市内有力自営業者
	⑤地縁	地元部落の漁業者など
	⑥専門家の関与と理論	大学教員・シンポジウム（人的・情動的資源）

出典）帯谷，2003

程度充実しているかにより，その運動の成果は自ずと決まってくる。

熊本ものづくり塾を中心とした木育運動は，これらの資源を獲得し，あるいは自ら生成することにより，活動を拡充していったと言える。熊本ものづくり塾が用いた資源について，以下に整理する。

第2節 先導的担い手の獲得と拡充

環境保全運動の推進や森林化社会の実現のためには，それらの一翼を担うヒトを組織化しなければならない。また，組織化のためにはヒトを集め，集合的に変革させなければならない。この機会となるのが緩やかではあるが「くまもとのづくりフェア」であり，さらには，運動の対象となる都市住民（一般市民）をリードする者・指導者（先導的担い手）の育成が「木育推進員養成講座」などである。ここでは指導者の獲得と拡充について考察する。

子どもやその保護者に木育を行うための能力（木育運動を推進するための

能力)として、①木や森、木育についての知識、②木を素材にしたものづくりの技能、③子どもやその保護者に分かりやすく伝える教授力、④木育を企画・運営する能力が必要である〔田口 2010〕。これらの基本的な部分を6時間の講義と演習で学ぶ機会として「木育推進員養成講座」などを設定した。

参加者は木材の専門家、教育の専門家、行政の専門家、一般市民、学生など多様であり、それぞれに得意・不得意分野（履修・未履修分野、経験・未経験領域）がある。本講座では、ある分野に特化した内容とはせず、すべてにおいて基本的なところを押さえるレベルとした。さらに、5~6人の異業種によるグループの混合班編成により研修を行った。この中で、「教え・教えられ」の学びが発生するように意図的に編成している。また、「正統的周辺参加」論に基づき、講座のカリキュラムを構成している〔Wenger 1993〕。さらに、講座以外に直接ものづくりを教える場面（実践場面）として「くまもとのづくりフェア」を設定し、この中でも「正統的周辺参加」論に基づき、緩やかに知識や技能が伝わる仕組みをとる¹。

林野庁の木育では先導的担い手を育成する講座として「木育インストラクター研修会」があった²。その受講対象では「林業関係者」を中心に据えていたのに対して、本実践では、当初から対象を限定せずに実施したことも特徴の1つである。林野庁は、「木工技術を持った者」、「木材需要拡大に直接的に関わる者」が、先導的担い手として有効と考えていたことが分かる。しかし、この考えは運動を一部の受益者による狭い範囲のものとし、間口を狭める結果になることが懸念される。

一方、熊本ものづくり塾による講座は、2016年末（8年間）で46回開催し1,566人の参加者を得ることができ、その中の約3割が「くまもとのづくりフェア」でスタッフとして活動を経験している。2010年度の参加者の内訳を見ると、教育関係者（高校・大学生、教師、社教主事）が83人

1 詳しくは、第2部第6章第3節「木育カリキュラムの開発」を参照されたい。

2 2009年度と2010年度に、全国5会場にて実施されたが、それ以降実施されていない。